

ポルトガル人日本発来航再論

中島, 楽章

九州大学大学院人文科学研究院歴史学部門 : 准教授 : 中国社会史 東アジア海域史

<https://doi.org/10.15017/13878>

出版情報 : 史淵. 146, pp.41-78, 2009-03-01. Faculty of Humanities, Kyushu University
バージョン :
権利関係 :

ポルトガル人日本初来航再論

中 島 楽 章

はじめに

ポルトガル人の日本初来航については、すでに百三十年近い研究史があり、日欧交渉史の立場から、あるいは銃砲史の観点から、多くの論考が発表されてきた。さらに一九九〇年代からは、東アジア海域史の視点からも、ポルトガル人の日本来航に対する再検討が進められつつある。しかしポルトガル人の日本初来航の年次については、一五四二（天文十一）年と一五四三（天文十二）年の両説があり、今なお決着がつかっていない。欧米ではもと一五四二年説が有力であったが、一九四六年に発表されたゲオルグ・シュールハンマー氏の論文によつて、現在ではおおむね一五四三年説が定着している。一方日本では、一般的には一五四三年説が比較的よく知られていたが、近年ではむしろ一五四二年説を主張する論考が多くなっている。

これに対して、筆者はさきに「ポルトガル人の日本初来航と東アジア海域交易」〔『史淵』一四二輯、二〇〇五年、以下中島「海域交易」と略称）を発表し、先行研究を批判的に検討して、ポルトガル人初来航の年次は一五四三年とするのが妥当であると結論した。この論文の刊行後も、約三年間のあいだに、関連する研究がいくつも発表

されている。その多くは一五四二年説をとっているが、若干の論考では一五四三年説をとり、あるいは両説を併記している¹⁰⁾。こうした諸論考によって、新たに有益な史料や論点も提示されているが、一方で多くの論者が、先行研究を必ずしも十分にふまえないまま自説を主張する結果、論点¹¹⁾が十分に整理されず、議論が錯雑化している傾向も否定できない。

さらに最近、清水紘一氏は「ポルトガル人のレキオ（琉球）初来説をめぐって——日欧交渉の初期過程」（『外政史研究』七号、二〇〇八年）「以下、清水「初来説」と略称」を発表し、筆者の前稿に対して反批判を行い、一五四二年説を強く主張している。しかし清水氏の論拠には疑問点が多く、主要な論点についてあらためて批判的検討を加える必要がある。以下本稿では、まずポルトガル人初来航に関する基本史料を再検討して、その解釈をめぐる諸問題を整理して論点を明確化し、あらためてポルトガル人日本初来航の年次と、その実像について考察を加えてみたい。全体として前稿と重なる議論も多くなるが、ご理解いただきたい。また本文において先行研究の問題点に逐次検討を加えた場合、行論が寸断され論旨を追うことが難しくなるため、先行研究の批判的検討は基本的に脚注で行うことにしたい。

一 ポルトガル人日本初来航をめぐる基本史料

ポルトガル人の日本初来航の年次については、三つの基本史料の解釈をめぐって、一五四二年説と一五四三年説との論争が続けられてきた。三つの基本史料とは、I a アントニオ・ガルヴァン『世界発見記』、I b ガルシア・デ・エスカランテ・アルバード「報告書」、II 玄之玄昌「鉄炮記」である。まず本節では、以上の基本史料について簡単に説明し、その主要部分を紹介しておきたい。

I a アントニオ・ガルヴァン『世界発見記』(以下、『発見記』と略称)

アントニオ・ガルヴァン (Antônio Galvão) は、一五三六〜三十九年にモルッカ諸島のテルテナ島で司令官カピタンの任にあり、ポルトガルのモルッカ進出に大きな役割をはたした人物である。しかし一五四一年にポルトガルに帰国した後は王室に冷遇され、晩年はリスボンの王立病院に寄寓してこの『発見記』(Tratado dos Descobrimentos)の著述に専念し、一五五七年に没した。『発見記』は古代から一五五三年までのヨーロッパ人による地理的発見の編年史であり、彼の没後、一五六三年に出版された⁽¹³⁾。ただしその内容の多くは、既存の文献や伝聞などの二次史料に基づいていることに注意しなければならない。

『発見記』では、ポルトガル人の日本発見について次のように記している。

一五四二年に、ディオゴ・デ・フレイタス (Diogo de Freitas) が一船のカピタンとしてシャム王国のドドラ市「アユタヤ」にいたところ、彼のもとから三名のポルトガル人がチナに向かう一艘のジャンク船で逃走した。彼らの名はアントニオ・ダ・モタ (Antônio da Mota) 、フランシスコ・ゼイモト (Francisco Zeimoto) 、アントニオ・ペシヨット (Antônio Pexoto) といった。三〇余度の地点にあるリャンポーの町に入港する航路を進んだところ、船の後方に強風をうけ、彼らを陸から離した。数日後、彼らは東方三十二度に位置するある島を見た。それはジャボインスといい、よく書物でその財宝について語られるあのシパンガス⁽¹⁴⁾のようである。そのくらいこの諸島は黄金や、豊富な銀やその他の財宝をもまた有しているのである。

つまりディオゴ・デ・フレイタス配下の三人のポルトガル人が、ジャンクでシャムからリャンポー(寧波近海の双嶼)に向かう途中、暴風によって漂流し、北緯三十二度附近で日本を発見したというのである。ただしこの史料では、彼らが種子島(北緯三十度にあたる)に漂着したとも、鉄炮を伝えたとも記されておらず、日本に関する記述も黄金や銀に富むというだけで、きわめて漠然としている。

I b ガルシア・デ・エスカランテ・アルバラド報告書（以下、「報告書」と略称）

一五四二年、メキシコ副王アントニオ・デ・メンドサ（Antonio de Mendoza）は、ルイ・ロペス・デ・ビヤロボス（Ruy López de Villalobos）率いる艦隊を東南アジア海域に派遣して、メキシコとアジアを結ぶ航路を開こうとした。ガルシア・デ・エスカランテ・アルバラド（García de Escalante Alvarado）は、この艦隊の商人頭（Factor）という要職にあつた人物である。ビリヤロボス艦隊は一五四二年十一月にメキシコを出帆し、一五四三年二月にミンダナオ島に到着して、その地に拠点を築こうとしたが成功せず、一五四四年三月には、モルッカ諸島のティドレ島に移動した。しかし艦隊はメキシコへの帰路を開拓することができず、やむなく一五四五年十月に、テルテナ島のポルトガル人に投降した。エスカランテを含む乗員はポルトガル船で送還され、一五四八年八月にリスボンに到着した⁽¹⁵⁾。エスカランテがリスボンにおいて、艦隊の遠征記録とアジアで収集した情報をまとめ、メキシコ副王に報告したのが、この「報告書」である。

エスカランテ「報告書」には、『発見記』にも登場するディオゴ・デ・フレイタスが語った、ポルトガル人の琉球漂着に関する記事が収められている。ディオゴ・デ・フレイタスは、テルテナ島の司令官に任じられた弟のジョルダン（Jordan）・デ・フレイタスとともに、一五四四年十一月にテルテナ島に渡来し、十二月にはビリヤロボスと会談している。エスカランテもこのころディオゴ・デ・フレイタスに会って、直接に琉球漂着に関する情報を得たのであろう⁽¹⁶⁾。

彼「フレイタス」がシャン「シヤム」の町に船を留めていた時、そこへレキオたちのジャンクが一隻やってきた。彼はこれらの人々と大いに話を交わした。……彼「フレイタス」は、彼らレキオ人と非常によい友人となり、そこを去つたが、レキオ人は自分の国がどこにあるかを彼に言おうとしなかつたのである。

またこのようなことも起つた。彼「フレイタス」と一緒にそこ「シヤム」にいた中の、ポルトガル人二人が

チナ沿岸で商売しようと一隻のジャンクで向かったが、彼らは暴風雨にあつてレキオスのある島へ漂着した。そこで彼らはその島々の国王から手厚いもてなしを受けた。それは、ジャンクで交際したことのある「レキオ人の」友人たちのとりなしによるものであつた。彼らは食料を提供され立ち去つた。

これらの人々が「レキオ人の」礼儀正しきや富を目撃したことから、他のポルトガル商人たちもチナのジャンクに乗つて再びそこへ行つた。彼らはチナ沿岸を東に航海し、さきの島に着いたが、今回は上陸を許されず、持参した商品とその値段の賞書を提出すべきこと、及び代金は直ちに支払われることが申し渡された。ポルトガル人たちはそのとおり提供したので、支払いをすべて銀で受け取り、食料を与えられ、退去を命ぜられた。¹⁷⁾

この記事には年次が記されていないが、シュールハンマー氏はフレイタス兄弟が一五四四年八月にマラッカからモルッカ諸島に向かつたことから逆算して、フレイタスの部下が最初にレキオスに漂着したのは一五四二年、ふたたびレキオスに渡航したのは一五四三年であると推定している。¹⁸⁾このように「発見記」とエスカランテ「報告書」の記事は、基本的なストーリーがおおむね共通しており、同一の事件を伝えた史料であることは疑いない。ただしポルトガル人の発見地を、「発見記」では日本とし、「報告書」では琉球とする点が大きく異なり、この問題の解釈が、ポルトガル人の日本初来年次をめぐる論争の焦点となつてきたのである。

II 文之玄昌「鉄炮記」

文之玄昌(号は南浦)は、臨済宗の禅僧で宋学にも通じ、島津氏のブレンンとして外交文書の起草を担当した人物である。彼が一六〇六(慶長十一年)、種子島久時の依頼により、久時の名義で代筆したのが「鉄炮記」であり、のちに彼の『南浦文集』巻一に収録された。¹⁹⁾「鉄炮記」では、久時の父である種子島時堯が、種子島に來航

したポルトガル人から鉄炮を伝授され、その製造に成功したプロセスが詳細に記述されている。かなりの長文であるが、ここでは主要部分を引用しよう。

天文癸卯秋八月二十五丁酉、我が西村の小浦に一大船あり。何れの国より来るかを知らず。船客は百余人、その形は類せず、その語は通ぜず、見る者は以つて奇怪となす。その中に大明の儒生一人、五峯と名のる者あり。今その姓字を詳にせず。時に西村の主宰に織部丞なる者あり、頗る文字を解す。偶たまま五峯に遇い、杖を以つて沙上に書きて云く、「船中の客、何れの国の人なるかを知らず。何ぞその形の異なるや」と。五峯は即ち書きて云く、「これは西南蛮種の賈胡なり」。……これを我が祖父の恵時と老父の時堯に告ぐ。時堯は即ち扁艇数十をしてこれを挈ひかせ、二十七日己亥に至りて、船を赤尾木津に入らしむ。……

賈胡の長二人あり、一を牟良叔舎ムラシユクシヤと曰い、一を喜利志多侘孟木キリシタダマウダと曰う。手に一物を携う。長さこと二三尺、その体たるや、中は通じ外は直にして、重きを以つて質となす。その中は常に通ずと雖も、その底は密塞するを要す。その傍に一穴あり、火を通ずるの路なり。……時堯はその価の高くして及び難きを言わず、蛮種の二鉄砲を求めて、以つて家珍となす。その妙薬の搗篩・和合の法は、小臣の篠川小四郎をしてこれを学ばしむ。……時堯は把玩の余り、鉄匠数人をして、その形象を熟視せしめ、月鍛季鍊し、新たにこれを製らんと欲す。その形制は頗るこれに似たりと雖も、その底のこれを塞ぐゆえん所以を知らず。

その翌年、蛮種の賈胡、復た我が島の熊野の一浦に来る。……賈胡の中、幸いに一人の鉄匠あり。時堯は以つて天の授くる所となし、即ち金兵衛尉清定なる者をして、その底の塞ぐ所を学ばしむ。漸く時月を経て、その巻いてこれを藏おさむることを知る。ここに於いて、歳余にして新たに数十の鉄砲を製る。……

これによれば、一五四三（天文十二年八月二十五日（新曆九月二十三日））に、種子島南端の西之村に百余人の船客を乗せた大船が着岸した。その中に「五峯」と名のる明人があり、筆談により彼らが「西南蛮種の賈胡」

【表1】I a 『発見記』・I b 「報告書」・II 「鉄炮記」の内容対照

史料名	年次	到達地	ポルトガル人の名前	到達までの状況	到達地での行動	翌年の再来航
I a ガルヴァン 『発見記』	1542年	日本西方 北緯32度	ディオゴ・デ・フレイタス配下 アントニオ・ダ・モタ フランシスコ・ゼイモト アントニオ・ベジョット	シャムからジャンク でリャンポー(双嶼) に向かう途中、暴風 により漂流	北緯三十二度で日 本を遠望	記載なし
I b エスカランテ 「報告書」	1542年 (推定)	レキオス (琉球)	ディオゴ・デ・フレイタス配下 二人のポルトガル人	シャムからジャンク で中国沿岸に向かう 途中、暴風により漂 着	シャムで交際した レキオ人の仲介に より、国王に厚遇 されて帰還	他のポルトガル人 がレキオに渡航す るが、上陸を許さ れず退去
II 文之玄昌 「鉄炮記」	1543年 8月25日	種子島 西村浦	賈胡の長 牟良叔舎 喜利志多侘孟太	異形の船客百余人を 乗せて来航 明人の五峯も同乗	種子島時堯が船を 廻航し、牟良叔舎 らから鉄砲を購入	「賈胡」が種子島に 再来航し、銃底の 塞ぎ方を伝授

であると告げた。報告をうけた種子島時堯は、この船を曳舟で赤尾木津（現在の西之表）に廻航させた。さらに時堯は、「賈胡の長」である「牟良叔舎」・「喜利志多侘孟太」が鉄砲を使用するのを見て強い関心を示す。時堯は鉄砲を高価で買いつつて修練につとめ、さらにその模造を試みたが、銃底部を塞ぐ方法がわからなかった。しかし翌一五四四（天文十三）年に「蛮種の賈胡」がふたたび種子島に来航し、銃底を塞ぐ技術を伝授したため、一年あまりで数十挺の鉄砲を製造することに成功したというのである。なお一六七七（延宝五）年に編纂された『種子島家譜』にも、「鉄炮記」とほぼ同内容の、より簡略な記事が収められている。⁽²¹⁾

以上で紹介した、ポルトガル人の日本初来航をめぐる三つの基本史料の要点を整理したのが、【表1】である。このうちI a 『発見記』とI b 「報告書」については、「一五四二年に、シャムに停泊していたディオゴ・デ・フレイタスの配下のポルトガル人が、ジャンクで中国沿岸に向かう途中で暴風により漂流し、未知の土地を発見した」という基本的なストーリーが共通するところから、ほぼすべての研究者が同一の事件を伝えた記事だとみなしている。問題はII「鉄炮記」もまた、I a・I bと同じ事件に関する史料であるか否かである。初来航を一五四二年とする論者は、I a・I b・IIはすべて、一五四二年のポルトガル人の種子島への漂着という同一事件を伝えているとみなし、初来航を一五四三年とする

論者は、I a・I bは一五四二年のポルトガル人の琉球^{シキオス}への漂着、IIは一五四三年のポルトガル人の種子島への初来航という別々の事件を記していると考えるのである。次節ではあらためて両説の論点を整理して、再検討を加えてみよう。

二 一五四二年のポルトガル人漂着——琉球が日本か——

ポルトガル人の日本初来航を一五四二年とする論者が、I a『発見記』と、II「鉄炮記」が、いずれも一五四二年のポルトガル人の種子島漂着という同一の事件の記録であると想定するもつとも主要な論拠は、両者に現れる人名が相似することであった。I a『発見記』では、日本発見者としてアントニオ・ダ・モタ、フランシスコ・ゼイモト、アントニオ・ペシヨットの三名の名を挙げ、II「鉄炮記」では、種子島に来航した「賈胡の長」として「牟良叔舎^{ムラシユクシヤ}」・「喜利志多侘孟太^{キリシタダマウタ}」の名を挙げる（フリガナは慶安二年版『南浦文集』による）。一五四二年説をとる論者は、「牟良叔舎^{ムラシユクシヤ}」はフランシスコ（ゼイモト）の、「喜利志多侘孟太^{キリシタダマウタ}」は（アントニオ）ダ・モタの音写であるとみなすのである。⁽²²⁾このうち、「喜利志多侘孟太」は、明らかにクリストヴァン・ダ・モタ（Christóvão da Mota）と読むことができる。ただしダ・モタとはポルトガルでは特に珍しい姓ではなく、⁽²³⁾「喜利志多侘孟太」とアントニオ・ダ・モタ両者は同姓の別人である可能性も高い。⁽²⁴⁾一方、「牟良叔舎」とFranciscoでは、日本語でも中国語でもかなり発音が遠く、⁽²⁵⁾それをただちにフランシスコ・ゼイモトとみなすことは難しい。一方で、I a『発見記』・I b「報告書」と、II「鉄炮記」との相違点はかなり多い。というよりも、共通点はほとんどないといってもよい。特にIIでは鉄炮伝来について詳述するのに対し、I a・I bではその記述はいっさいなく、I aでは日本に上陸したかどうかさえも不明である。さらにI a『発見記』ではポルトガル人の到達

地を種子島が位置する北緯三十度ではなく、北緯三十二度と記している。これは日本周辺の緯度についての正確な情報がなかったための誤りとして説明できるかもしれない。⁽²⁶⁾しかし一方、I b「報告書」ではポルトガル人の漂着地を種子島ではなく、琉球^{レキオス}と明記している。この問題について、一五四二年説をとる論者は、当時の琉球王国の領域は奄美諸島まで及んでいたため、ヨーロッパ人も種子島を含む九州西南の諸島を、漠然と琉球^{レキオス}と認識していた可能性がある⁽²⁷⁾と説明している。実際に一五〇年代以前にポルトガル人が作成した地図では、日本がレキオスの一部として描かれていたという。⁽²⁸⁾

しかしI b「報告書」によれば、二人のポルトガル人がレキオスに漂着した際に、シヤムで知りあつたレキオ人の仲介により、国王に厚遇されたという。種子島の住民がシヤムに渡航したとは考えられず、このレキオ人はやはり琉球王国から来航したと見るべきであろう。さらに『歴代宝案』によれば、琉球国王尚清は、一五四〇(嘉靖十九)年と翌一五四一(嘉靖二十)年に、それぞれ一隻の貿易船をシヤムに派遣している。⁽²⁹⁾シヤムに来航したレキオ人のジャンクとは、上記の貿易船のどちらかであつたことは疑いない。⁽³⁰⁾

さらにフレイタスはシヤムに来航したレキオ人について詳しく叙述しているが、その描写からも彼らが種子島ではなく琉球王国から来たことが裏付けられる。フレイタスによれば、レキオ人は「非常に器量良しで、色白で」あり、「彼らの商品は金と銀」であつたという。またフレイタスは、「彼らの国王は、未婚者とか、子供づれ、財産を持つた者などがその土地を出ることを許さない。というのは、いかなる者も海外に留まらないようにするためである」とも述べ、また「レキオ人は自分の国がどこにあるかを彼(フレイタス)に言おうとしなかつた」とも伝えている。一方、ポルトガルの第二代インド総督として、一五二一年にマラッカを占領したアフォンソ・デ・アルブケルケ(Afonso de Albuquerque)の伝記(一五五七年刊)では、そのころマラッカに来航していた琉球^{レキオ}人について次のように記している。「かれらの国は島で、同地からマラッカに航海して来る。……彼らはまた煉瓦の

形をした黄金を携えて来る。……たいへん口数が少なく、かれらの国のことをだれにも話さない。……このゴレス人の国は琉球レキョウと呼ばれる。かれらは色が白い。……かれらは短い期間に仕事をすませるように努力し、誰もその土地に留まろうとはしない。⁽³¹⁾この記述は、琉球人が色白で黄金をもたらすこと、自国について語らず、海外に留まろうとしないことなど、フレイタスの情報と非常によく一致し、フレイタスがシャムで交流したレキオ人が、まさしく琉球王国からの来航者であったことを示している。

またI b 「報告書」では、翌年にも別のポルトガル人がレキオスに渡航したが、退去を命じられたと説く。これに対しII 「鉄炮記」では、翌年もポルトガル人が種子島に来航し、銃底を塞ぐ技術を伝えたことと記している。この点からも「報告書」にいうレキオスは、種子島ではなく琉球王国を指すと見るべきだろう。その場合、二度目に琉球に渡航したポルトガル人が退去を命じられた理由も説明することが可能である。すなわちこれに先だつて、琉球では漳州の密貿易者である陳貴らが騒乱を起こし、その際に多くの華人密貿易者が殺傷されるという事件があった。これを知った明朝の嘉靖帝は、一五四二年五月に、琉球が今後も密貿易を放任すれば、「即ちすなわちにその朝貢を絶つ」という厳しい勅旨を下したのである。⁽³²⁾ポルトガル人が翌年に琉球に来航した時点では、琉球はこの勅旨により、華人商人との私貿易を抑制せざるを得なかった。この時もポルトガル人は華人海商のジャンクに同乗して来航したと思われ、このため海上での取引は認められたものの、上陸は許されず退去を命じられたと考えられるのである。⁽³³⁾

三 『発見記』・「報告書」・「鉄炮記」の史料批判

以上で検討したように、I b 「報告書」とII 「鉄炮記」の内容を信じるかぎり、I a 「発見記」が説くように、

ポルトガル人が一五四二年に日本に到達したと考えることは難しい。換言すれば、ポルトガル人が一五四二年に種子島に漂着したと考える場合には、II「鉄炮記」が、一五四二年の種子島漂着を一五四三年に誤り、I b「報告書」が、一五四二年の種子島漂着を琉球漂着と改変して記録した、という二つの仮説を想定する必要があるわけである。逆にポルトガル人が一五四二年に琉球に漂着し、四三年に種子島に来航したとみる場合は、I a「発見記」が、一五四二年の琉球漂着を日本漂着と誤記したと考えることになる。したがって両説の当否を判断するためには、三つの基本文献の史料的可信性を批判的に検討することが必要になる。

(一) 『発見記』の日本発見記事 まず I a『発見記』について検討してみよう。著者であるアントニオ・ガルヴァンは、テルテナ島の司令官カピタンとして、ポルトガルのアジア進出の最前線にいた人物であり、彼がアジア海域にいた時代についての記事には、自身の経験や現地での情報に基づく叙述も多いだろう。しかしガルヴァンは一五四一年にポルトガルに帰国しており、『発見記』の記事の多くは、彼がリスボンにおいて得た先行文献や、間接的な伝聞に基づいていると考えられる。⁽³⁴⁾

『発見記』における日本「発見」の記事も、I b「報告書」やII「鉄炮記」にくらべてきわめて簡略であり、日本について具体的な情報は何もなく、それが古くから黄金の国として知られるシパンガス(ジパング)であると述べるにすぎない。さらにこの記事の直後には、やはり一五四二年に、スペイン艦隊がカリフォルニアの沿海で日本または中国から来航した船に遭遇したという、とうてい信じがたい記事が続いている。⁽³⁵⁾『発見記』における一四四〇年代の記事には、このほかにも信憑性の低い記述が含まれている。⁽³⁶⁾『発見記』の成立年代はたしかに「鉄炮記」より早いものの、記述の精度や具体性、当事者との関係性などについては「鉄炮記」と比べてかなり遜色があり、その史料的可信性には一定の留保が必要であろう。ガルヴァンのモルツカ諸島における事績を詳述した生

田滋氏も、彼の『発見記』については、「大航海時代の歴史的事実を知るための史料としては価値がない」と評価している⁽³⁷⁾。

なおディオゴ・デ・コウト (Diogo do Couto) の『アジア史』(Decadas da asia) 第五編(一六一二年刊)にも、『発見記』と同じ三名のポルトガル人が、一五四二年にシャムから漳州に向かう途中で暴風雨により日本に漂着したという記事がある。コウト『アジア史』は、ポルトガルのアジア進出に関する公式の年代記の一つであるが、生田滋氏は、コウト『アジア史』は「実際には閲読可能であったごく僅かの史料に基づいているため、叙述には不満が残る」とも評価している⁽³⁹⁾。また岡本良知氏は、コウトの伝える日本発見記事は、ポルトガル人の漂流の様子を詳述しながら、漂着地を明示せず、日本に関する具体的な情報もないところから、『発見記』を敷衍した叙述ではないかと推定している⁽⁴⁰⁾。なお一六三四年に完成したジョアン・ロドリゲス (João Rodrigues) 『日本教会史』(Historia da Igreja do Japão)では、さらに『発見記』の記事を種子島への鉄炮伝来と結びつけて、一五四二年にポルトガル人が種子島に漂着したと説いたのである。

(2) 「報告書」の琉球漂着記事 Ia 『発見記』の日本発見記事が、リスボンで間接的な伝聞により記されたと思われるのに対し、Ib 「報告書」は、現地で当事者から直接に聞いた情報による、はるかに根本的な一次史料である。ただしその一方、「報告書」はポルトガルとスペインがアジア海域における優先権をめぐる競争が激しく競合する状況下で、ポルトガル人のフレイタスがスペイン人のエスカランテに伝えた情報であった。このため一五四二年説をとる論者は、エスカランテが意図的にポルトガル人の日本発見を隠匿した可能性を指摘している。つまりフレイタスはエスカランテに、ポルトガル人が日本を発見したことを伝えたが、エスカランテはポルトガル人が新たに発見した日本に対して優先権を得ることを恐れ、メキシコ副王にはポルトガル人の日本発見という情報

を隠し、琉球^{レキオス}発見と改変して報告したと推定するのである。⁽⁴²⁾

しかしこのように考えた場合、なぜエスカランテはポルトガル人の日本発見は隠しながら、あえて琉球発見については報告したのかという疑問が生じる。またこの「報告書」は、メキシコ副王への内部報告書であり、「発見記」のような公開を前提とした著作ではない。エスカランテはビリヤロボス艦隊がアジアで得た情報を、副王に對して正確に報告することを期待されていたはずであり、あえてポルトガル人の日本発見を隠匿する必然性があるだろうか。

この問題に関連して、的場節子氏が紹介する、デイオゴ・デ・フレイタスの弟で、テルテナ島^{カピテン}司令官であったジョルダン・デ・フレイタスが、一五四五年二月付でポルトガル国王に送った書簡が注目される。ジョルダンはこの書簡で、ティドレ島にいるビリヤロボス艦隊が、ミンダナオ方面に北上して中国や琉球との交易を試みることに、強い懸念を示しているが、日本についてはなんら言及していない⁴³。ジョルダンがビリヤロボス艦隊が琉球と通商を行うことを危惧していることから見て、兄のデイオゴがエスカランテにポルトガル人の琉球漂着について語った意図は、ポルトガル人がすでに琉球を発見し、通商を行ったことを伝えるためであったと見てまちがいない。またジョルダンがこの書簡で日本についてなんら触れていないことは、この時点でフレイタス兄弟が日本発見の情報を得ていなかったことを推測させる。

周知のように、ポルトガルとスペインは一四九三年のトルデシリヤス条約によって、大西洋上で勢力圏を東西に二分割したが(デマルカシオン)、その後もアジア東部における両国の勢力圏は不明確であった。特に香辛料の大産地であるモルッカ諸島の帰属は大問題であり、スペインが一五二〇年にマゼラン艦隊を派遣した最大の目的も、新大陸経由の西回りでモルッカ諸島に到達することにあった。一五二九年のサラゴサ条約によって、モルッカ諸島の領有権はポルトガルに帰属することになったが、その後もアジア海域東部のフィリピン諸島や琉球の帰

属は未確定であった。⁽⁴⁴⁾

特に琉球は、ポルトガル人が東南アジア海域に現れた当初から注目されていた。トメ・ピレス (Tomé Pires) が『東方諸国記』(一五二五年以前に完成)において、マラッカに來航していた琉球人^{レケオ}について詳述したことを筆頭⁽⁴⁵⁾に、一五一六年ころ執筆された『ドウアルテ・バルボザの書』⁽⁴⁶⁾、および前節で紹介した『アルブケルケ伝』なども、マラッカの琉球人について詳しく記している。これらの記録では、いずれも琉球人が正直で富裕な商人であり、マラッカに黄金をはじめとする多くの商品をもたらしていたと伝えている。一五一一年にポルトガルがマラッカを占領してから、琉球人の來航はとだえたが、その後もポルトガル人はアユタヤ・パタニ・広州湾などにおいて、これらの諸港にしばしば來航していた琉球人と接触したはずである。一五一七年に広州湾に來航したフェルナン・ペレス・デ・アンドラーデ (Fernão Peres de Andrade) も、広州において琉球人に遭遇し、琉球との交易を開くために一艘の船を派遣している。この船は漳州まで北上したが、琉球へ渡る季節風を逃し、広州湾に引き返した。⁽⁴⁷⁾ これに対し日本人については、『東方諸国記』にもごく漠然とした記述しかなく、⁽⁴⁸⁾ 東南アジアや広州湾において接触する機会もなかった。

一五四二年にメキシコ副王がビリャロボス艦隊を派遣した目的も、フィリピン諸島の領有だけではなく、中国や琉球との通航を開くことにあった。アントニオ・ガルヴァンも(おそらく帰国後に)ポルトガル女王に送った書簡において、メキシコ副王がビリャロボス艦隊を派遣して、中国・琉球・モルッカへの到達をめざしていると述べている。⁽⁴⁹⁾ さらに一五四四年十二月にテルテナ島のポルトガル人が国王に送った書簡でも、ビリャロボス艦隊から脱走したポルトガル人船員の証言として、艦隊の乗組員の間では「チナとレキオスを発見することしか話されていなかった」と伝えている。⁽⁵⁰⁾ ビリャロボス艦隊の重要な目的の一つは、琉球を発見し通航を開くことだったのであり、このためディオゴ・デ・フレイタスは、この艦隊の幹部であったエスカランテに、すでにポルトガル

が琉球を発見し、優先的な通交権を持つことを伝えたのである。

デイオゴ・デ・フレイタスが日本発見情報を知りながら、それをエスカランテには琉球発見として語った、あるいはエスカランテがフレイタスから日本発見情報を聞いたが、それをメキシコ副王には琉球発見として伝えたとすれば、フレイタス配下のポルトガル人が琉球に漂着し、シヤムで知りあつた琉球人の仲介で厚遇されたという、「報告書」の内容自体がフィクションと考えなければならない。しかし実際には、フレイタスは一五四四年末にエスカランテと会談した際に、一五四二年に彼の配下のポルトガル人が琉球に漂着したことは語つたが、四三年に別のポルトガル人が種子島に到達した情報は得ておらず、当然それを語ることもなかつたと考える方が自然であろう。

「鉄炮記」によれば、ポルトガル人は一五四三年の新曆九月二十三日に種子島に來航しており、翌春の東北風によつて東南アジア方面に帰帆したと思われる。かりに種子島を三月ごろに出帆してシヤム方面に直帰したとすれば、シヤム方面に到着するのは四月〜五月ごろになる。一方フレイタス兄弟は、一五四四年二月にはシヤムを離れ、マラッカ經由でテルテナ島に向かつたと推定されている。⁽⁵²⁾このように想定すると、フレイタス兄弟は種子島からポルトガル人が帰港する前にシヤムを離れ、日本発見の情報に接していなかつたと考えられるのである。⁽⁵³⁾

(3) 「鉄炮記」の種子島來航記事 最後に「鉄炮記」の史料の信頼性について考えてみよう。一六〇六年に執筆された「鉄炮記」は、たしかに一五五〇年代の著作である『発見記』とくらべて、同時代的な史料とはいえない。しかし内容的にみると、『発見記』ではポルトガル人が日本に上陸したかどうかさえ不明なのに対し、「鉄炮記」の記述ははるかに具体的に詳細である。南浦文之が種子島久時の依頼で「鉄炮記」を代筆するにあたり、種子島家から鉄砲伝來に関する旧記類を提供された可能性も高く、また種子島久時自身も、父の時堯などから、鉄砲伝來

の状況をよく聞いていたに違いない。「鉄炮記」は『発見記』にくらべ、同時代性については遜色があるとはいえず、『発見記』がリスボンで間接的伝聞によつて書かれたと思われるのに対し、現地において当事者であつた種子島家からの情報によつて執筆されたという点では、より高い信頼性を期待できるだろう。

これに対し清水紘一氏は、南浦文之が「鉄炮記」を執筆した当時、種子島家の重要文書は同族の有力者が管理しており、文之は関係文書を十分に吟味できず、主として種子島家の家臣であつた一老人が私的な立場で記した「老人記録」に基づいて、史実混錯のまま鉄炮伝来の過程を叙述したと推測している⁽⁵⁴⁾。しかしこの推論は首肯しがたい。まず「老人記録」なる原史料を仮定すること自体に無理があるし、「鉄炮記」執筆時に、一族の有力者が種子島家の諸記録をすべて掌握し、種子島久時のもとにはほとんど旧記類がなかつたとも考えがたいからである⁽⁵⁶⁾。

さらに「鉄炮記」の信頼性を裏づける史料として、ポルトガルの冒険商人であつたフェルナン・メンデス・ピント (Fernão Mendez Pinto) の『東洋遍歴記』(Peregrinação、以下『遍歴記』と略称) を挙げる事ができる。『遍歴記』はピントの自伝的な冒険旅行記であるが、事実と創作が混交し、記述の誇張や混乱も多く、史料としては厄介である。ピントは自分が日本を発見した三人のポルトガル人の一人であつたと語るのだが、実際には一五四一年から四三年まで、彼はビルマにいたようである。しかしピントは一五四四年には実際に日本に渡航したと思われ、当時の航路から見て種子島を訪れた可能性も高い。彼はこの日本滞在の際に前年のポルトガル人初来航の情報を得て、それを『遍歴記』に取り入れたのであろう⁽⁵⁷⁾。

『遍歴記』では、種子島に初来航したポルトガル人は、ピント自身とディオゴ・ゼイモト、クリストヴァン・ポラリオの三人であるとする。彼らは暴風雨により種子島に漂着し、島の前面に投錨して交易の希望を告げ、曳舟に導かれて大きな集落のある港に入った。すると種子島の領主ナウトキンが到来し、商品を交易し欲待した。さらにナウトキンはゼイモトが鉄砲で狩猟をするのを見て、強い関心を示したので、ゼイモトはナウトキンに鉄砲

を贈り、その製法を伝授した。ナウトキンは鉄砲の練習に励むとともに、家臣にそれを模造させ、ポルトガル人が五か月半後に種子島を出航するまでに、六百挺以上の鉄砲が造られたという。⁽⁵⁸⁾このストーリーは「鉄砲記」の叙述と驚くほど共通している。ジャンクが着岸した「島の前面」とは種子島南端の西之村であろうし、そこから曳舟で廻航された「大きな集落のある港」とは、種子島氏の居城があつた赤尾木港であろう。ナウトキンとは、種子島時堯の初名である「直時」を指すと考えられる。⁽⁵⁹⁾ポルトガル人が鉄砲を使用するのを見て、時堯（直時）が鉄砲を入手し、それを家臣に模造させたという記述も、「鉄砲記」とみごとに一致している。ただし五か月半の間に六百挺もの鉄砲が造られたというのは誇張も著しく、実際に数十挺の鉄砲が完成したのは一五四五年のことであつた。

『遍歴記』はピントがポルトガルに帰国後、一五七八年ごろまでに執筆され、一六一四年に出版された。⁽⁶⁰⁾十六世紀後半にポルトガルで書かれた『遍歴記』と、十七世紀初頭に薩摩で執筆された「鉄砲記」の記述が大筋で一致することは、双方の鉄砲伝来に関する記事が、おおむね事実をふまえていたことを示唆している。「鉄砲記」が後世の文献であることから、その史料価値を過小評価するべきではないであらう。⁽⁶¹⁾

要するにポルトガル人の日本初来航を一五四二年とする場合は、Ⅱ「鉄砲記」がその年次を誤記し、かつⅠb「報告書」が、意図的に日本発見を琉球発見と改変したと仮定する必要があるが、どちらの仮説も説得的とはいえない。これに対し初来航を一五四三年とする場合、Ⅰa「発見記」が一五四二年のポルトガル人のレキオス漂着を、誤って日本発見と記したと考えれば、他の問題はすべて整合的に解釈できるといのが筆者の立場である。⁽⁶²⁾

四 種子島来航南蛮船の実像をめぐって

ポルトガル人の日本初来航については、その年次をめぐって現在まで論争が続けられてきた。しかし一方、特に村井章介氏の研究を契機として、種子島へのポルトガル人來航を、ヨーロッパ人による地理的発見の一環という側面だけではなく、むしろアジア海域における華人通商網の拡大という文脈からとらえるという方向性は、多くの論考において共有されつつある。本節でもこうした見解をふまえて、おもに「鉄炮記」の記述を通じて、種子島に來航した南蛮船の実態について再考してみたい。ただし「鉄炮記」は大筋としては信頼しうる記録であるとしても、細部の表現には文之玄昌による文飾が含まれている可能性がある⁽⁶⁴⁾。このため「鉄炮記」の叙述だけでポルトガル人初來航の状況を論じるには限界があり、本節では「鉄炮記」の記事を中心に、関連する史料や文献を参照して、その実像について一応の考察を試みることにしたい。

(1) 來航船の船種 種子島に來航した南蛮船の船種については、「鉄炮記」には単に「一大船」と記すにすぎず、それが中国式のジャンクであったか、ポルトガル式のカラヴェル船であったかは不明である。一方『遍歴記』では、ピントたちは華人海賊のジャンクに同乗して種子島に漂着したとする。『遍歴記』の記述の真偽はともかく、一五四〇年代に來日したポルトガル人の多くが、華人ジャンクに同乗していたことは確かである。たとえば一五四四年に南九州に來航したペロ・デイエス (Pero Dias) などのポルトガル人⁽⁶⁵⁾、一五四五年ごろ豊後に來航したポルトガル商人のジョルジェ・デ・ファリヤ (Jorge de Faria)⁽⁶⁶⁾、そして一五四九年に來日したフランシスコ・ザビエルは、いずれも華人ジャンクに同乗して渡来している⁽⁶⁷⁾。その一方、一五四六年に薩摩に來航したジョルジュ・アルヴァレス (Jorge Alvarez) やフェルナンド・メネセス (Fernando Meneses) のように、みずからが船長

として来日したポルトガル商人もあつた。⁽⁶⁸⁾ただしポルトガル商人が船長であつた場合も、その船はジャンクであつた可能性もある。

一五四三年に種子島に到着したポルトガル人は、それが日本への初来航であつたことを考えれば、すでに九州方面への渡航の経験がある華人ジャンクに同乗していた可能性が強い。一五三〇年代に石見銀山などの日本銀生産が急増したことを受けて、一五四〇年代初頭から、華人密貿易者が積極的に九州に渡航をはじめていた。⁽⁶⁹⁾『種子島家譜』によれば、一五四〇(天文九)年六月には、唐船が種子島の竹崎浦に来航しており、翌四一年には豊後、四二年には豊前や平戸にも唐船が来航し、四三年には日向に十七艘、豊後でも五艘の唐船が来航したという。⁽⁷⁾一五四三年の時点で、華人海商はすでに九州方面への航路を十分に把握しており、ポルトガル人も彼らのジャンク船に便乗して来日したと考えるべきだろう。

(2) 来航の状況と航路 これまで通説的には、『発見記』の記事に基づき、ポルトガル人が乗つた南蛮船は暴風により種子島に漂着したと考えられていた。しかし『発見記』がポルトガル人の種子島来航を伝えた記事でないとすれば、この通説にも再検討が必要となる。「鉄炮記」では、「我が西村の小浦に一大船あり、何れの国より来るかを知らず」と記すだけで、暴風による漂着をうかがわせる描写はない。現時点では最初から種子島をめざして来航したのか、暴風により漂着したのか確定はできないが、「鉄炮記」の記述によるかぎり、漂着ではなく、当初から南九州方面をめざして来航した可能性も考えられるだろう。

初期に来日したポルトガル人は、一般にマラッカ・シヤム方面から中国沿岸を経由して九州に来航している。ピント『遍歴記』では、ポルトガル人はコーチシナ(ヴェトナム中部)から、広州湾沖の上川島・浪白澳に寄港し、さらに華人ジャンクで漳州に向かう途中で海賊に襲われ、さらに暴風により種子島に漂着したと述べてい

る。このストーリー自体をただちに信じることはできないが、東南アジアから広州湾・漳州湾を経由して、東シナ海を北上するというのが、日本方面に渡航する一般的な航路であったことは確かであろう。⁽⁷²⁾一五四九年にザビエルが日本に渡航した際も、六月二十四日に華人ジャンクでマラッカを出帆し、七月末に上川島に寄港して、漳州近海を通り、八月十五日に鹿児島に到着している。⁽⁷³⁾

おそらく一五四三年に種子島に来航したジャンクも、広州湾・漳州湾附近を経て、東シナ海を直行するか、あるいは琉球諸島・奄美諸島を経由して、黒潮にのって北上し、種子島に来航したのであろう。着岸地が種子島南端の西之村であることも、そのことを示唆している。一般に中国沿岸から日本へ出帆するには、端午（新暦六月初旬）から中秋（新暦九月中旬）までの西南風を利用する。⁽⁷⁴⁾このジャンクが東シナ海を直行して種子島に渡ったとすれば、九月初旬ごろに中国沿岸を出帆して、九月二十三日に種子島に到着したと思われる。

(3) 五峯と王直 「鉄炮記」によれば、南蛮船の乗員のなかに「大明の儒生一人、五峯と名のる者」があり、彼が砂上で西村織部丞と筆談し、この船が「西南蛮種の賈胡」の貿易船であることを伝えたという。「五峯」とは、後倭倭寇の大立者として知られる王直の号である。文之玄昌が「鉄炮記」の執筆にあたって、日本でも華人海商の代名詞的存在として知られていた「五峯」の名を拝借したという可能性も完全には否定できない。しかし村井章介氏も指摘するように、⁽⁷⁵⁾一五四〇年代前半の王直の活動から見て、この「五峯」が実際に王直であったとしても不思議ではない。鄭若曾『籌海図編』は当時の王直の活動について、「嘉靖十九年、時に海禁なお弛し。⁽⁷⁶⁾（王）直は葉宗滿と広東に之き、巨艦を造り、硝黄・絲綿等の違禁物を携帯し、日本・暹羅・西洋等の国に抵り、往来互市すること五・六年、致富すること貲られず。島人大いにこれに信服し、称して五峰船主となす」と伝えている。⁽⁷⁶⁾つまり王直は一五四〇（嘉靖十九）年ころから五・六年にわたり、広東と日本・シャム・西洋（東南アジア中西

部)を結ぶ密貿易に従事して巨万の富を築き、「五峰船主」と通称されたというのである。この記事によれば、王直が東南アジア諸港市で接触したポルトガル人を彼のジャンクに同乗させ、種子島に來航した可能性は十分に想定できる。

また王直は「五峰船主」と通称されたというが、「船主」とは「舶主」と同じく、船舶の所有者と船長の両方の意味があり、船舶の所有者が船長を兼ねることもあった。⁴⁷⁾ また王直は「巨艦を造り」ともあるので、王直は大型ジャンクの所有者兼船長であつたとも考えられる。とすれば、一五四三年に種子島に來航した「一大船」も、王直自身が所有し、かつ船長であつたジャンク船だつたと推測することができよう。

さらに王直は、翌一五四四(嘉靖二十三年)年には双嶼の密貿易集団に投じている。またこの年には大友氏が派遣した遣明船の二号船が、種子島を出帆して寧波近海に入港したが、朝貢を許可されず、双嶼あたりで密貿易を行つたようである。翌一五四五(嘉靖二十四)年には、この遣明船の帰国にあたり、王直が哨戒船を率いて同行し、旧曆六月に種子島に帰着した。⁴⁸⁾ さらに王直は、この年に双嶼に帰航する際に、日本人三人を連れ帰り、翌四六年にも日本に渡航している。つまり王直は、東南アジアとの密貿易でポルトガル人と接触して、彼らを種子島へと誘導し、さらにその直後に双嶼の密貿易集団に投じて、双嶼の密貿易に日本人を引き入れる役割を担つたと考えられるのである。

(4) ポルトガル商人の実態 「鉄炮記」によれば、五峯は來航船の乗客を「西南蛮種の賈胡」であると説明しており、そのなかには「賈胡の長」として、「牟良叔舍」と「喜利志多侘孟太」^{クリスツァン・メタ}の二名がいたという。五峯王直がジャンクの船主(舶主)だつたとすれば、彼らはこのジャンクに客商として同乗していたのであろう。トメ・ピレスは、十六世紀初頭のマラッカにおけるジャンク船貿易の利益分配について詳しく伝えている。それによれば、

ジャンクの所有者は航海に必要な物品をすべて装備し、ジャンクに同乗する商人は、一つか二つの船艙を割りあてられ、商品を監視し、取引するための人員を二、三人雇った。船がマラッカに帰港すると、商人はマラッカで積み込んだ商品の一定割合をジャンクの所有者に支払った。このほかにマラッカにいる商人が商品や資金を船主に委託し、帰港後に船主は利益の一定割合を投資者に支払い、残りを自分の収益にするという、いわゆるコンメンダ (commenda) 貿易も行われた。⁷⁹⁾ 種子島に來航したポルトガル人も、五峯王直が船主であるジャンク船に同乗し、船艙に自分の商品を積んで渡航した私貿易商人であったと思われる。

ポルトガルのアジア貿易では、当初は胡椒や香辛料などの重要商品の取引や、貿易船の運航は王室の独占とされ、商館長や要塞の司令官がその権利をにぎっていた。一方で商館員・兵士・船員などのポルトガル人勤務者も、若干の俸給を受けるほかに、船艙の一部を与えられ、自己資金で個人貿易を行うことが認められていた。こうしたポルトガル人勤務者の多くは、任期の満了後もアジアに残留し、しばしば現地人女性と結婚して、私貿易商人や傭兵として活動した。さらに一五三八年ころから、インド総督はポルトガル人勤務者に貿易船運航の権利を下付してそれに課税するようになり、私貿易商人もこうした貿易船に加わるようになる。⁸⁰⁾ また一方で、給与や糧食の不足などから逃亡する船員や兵士も多く、一五六五年までに、アジア各地に逃亡したポルトガル人は二千人にのぼったが、彼らもしばしば私貿易に従事していた。⁸¹⁾ 一五四〇年から双嶼の密貿易に参入し、一五四二年にフレイトスの船を脱走して琉球に漂着し、そして一五四三年に王直の船に乗って種子島に來航したのは、いずれもアジア海域でのローカル・トレードに従事する私貿易商人であったと考えられる。生田滋氏も、「こうした勤務者、あるいは民間ポルトガル人の活発な貿易活動を象徴するのが、一五四三年のポルトガル人の種子島來航である」と指摘している。⁸²⁾

(5) 南蛮船の乗員 「鉄炮記」では、種子島に着岸した南蛮船の乗船者について、「船客は百余人、その形は類せず、その語は通ぜず、見る者は以つて奇怪となす」と描写し、また西村織部丞は明人五峯に対し、「船中の客、何れの国の人なるかを知らず。何ぞその形の異なるや」と質問したと記している。こうした記述によれば、百余人の乗船者の多くは、日本人と似たような外見の華人ではなく、見なれない容貌の異民族であったことになる。おそらくこのジャンク船の乗員には、五峯をはじめとする華人や若干のポルトガル人のほか、東南アジアやインド洋方面の出身者も多かったのではないか。また東南アジアに移住した華人やポルトガル人は、現地住民と通婚することが多く、混血者も増加していた。当時のアジア海域で活動した貿易船には、こうした多様な出自をもつ人々が同乗し、諸民族雑居的な人的構成となることが多かったのである。

実際に東アジアに來航したポルトガル船には、多様な民族的出自をもつ船員が同乗していた。たとえば一五二二年にマラッカから広州灣に來航したポルトガルの貿易船には、インド西岸のマラバル地方の出身者や、カフル人 (Cafre)、アフリカ東南海岸出身の黒人⁽⁸³⁾も同乗していた。さらに一五四九(嘉靖二十八年)年、双嶼を逐われた密貿易船の掃討にあたっていた明朝の水軍が、福建南部の東山島でポルトガル船団を攻撃した際には、ポルトガル人三名、華人百十二名のほか、黒人十六名、「白黒異形、身材長大」な異民族四十六名、「番婦」二十九名を捕虜としていた。⁽⁸⁴⁾顧炎武『天下郡國利病書』にも、「嘉靖中、(ポルトガル)党類は更番に往來して私舶し、諸夷の中に雜りに交易す。首領の人は皆な高鼻白皙にして、広(州)人は能くこれを辨識す」とあり、嘉靖年間に広州灣に來航したポルトガル人が、私貿易船の「首領」として、諸民族と混在して私貿易を行っていたことを伝えている。⁽⁸⁵⁾種子島に渡來したジャンク船にも、「賈胡の長」である若干のポルトガル人や、五峯以下の多くの華人のほかに、東南アジアやインド洋方面の諸民族も少なからず乗船していたと見るべきだろう。

(6) 南蛮船の出航地 「鉄炮記」には、種子島に來航した南蛮船の出航地を具体的に示す手がかりはない。ただし上述のように、初期に來日したポルトガル人は、ほぼ例外なく東南アジアの港市から、広州灣・漳州灣方面を経て九州に到達している。当時の東南アジアの主要港市のなかで、東アジア貿易の拠点であり、かつ華人ジャンクとポルトガル商人の双方が來航する場所といえ、マラッカ・アユタヤ・パタニなどが考えられる。

ただし一五一一年のポルトガル人のマラッカ占領以降、東南アジア海域における東アジア貿易の中心は、シャム方面に移りつつあった。十六世紀初頭まで、マラッカは東南アジアの中心的な集散港であり、東南アジア島嶼部やインド洋方面の商品は、ムスリム商人やグジャラート商人などによってマラッカに運ばれていた。華人や琉球人の海商は、東アジアの商品をマラッカに輸出して、胡椒をはじめとする南海産品を輸入した。マラッカに次いで、シャム王国のアユタヤも、華人・琉球人海商の主要な貿易拠点であった。⁽⁸⁶⁾

しかしポルトガルのマラッカ占領によつて、ムスリム商人はマラッカを避けて、マレー半島のジョホール、スマトラ島のパサイやアチェ、ジャワ島のバンテンなどのイスラム系港市に分散していく。また華人海商のマラッカ來航も減少傾向にあり、琉球の貿易船も、一五一一年を最後にマラッカから撤退した。マラッカに代わつて、華人・琉球人海商の新たな貿易拠点として急成長したのが、マレー半島東岸のパタニである。アユタヤやパタニには、蘇木などのインドシナ半島の商品はもとより、胡椒などの東南アジア島嶼部やインド洋方面の商品も集まり、華人・琉球人海商がそれを東アジアに運んだのである。⁽⁸⁷⁾

これに対しポルトガル人も、直接に中国貿易に進出しようとした。早くも一五一三年にはポルトガル船が広州灣に渡航し、一五一七年にはフェルナン・ペレス・デ・アンドラーデの船団が広州城下で貿易を行い、大きな利益を取めた。ついでアンドラーデは『東方諸国記』の著者トメ・ピレスを北京に派遣し、明朝と正式な通交を開こうとしたが失敗に終わった。さらに一五一九年に広州灣に來航したポルトガル船団は、現地で多くのトラブル

を引きおこし、一五二一〜二二年には広東当局がポルトガル船団を攻撃して、広州湾から駆逐してしまった⁽⁸⁸⁾。

広州湾を追われたポルトガル人は、マラッカ・シヤム・パタニなどで密貿易を行っていた華人海商の手引きで、華人ジャンクに同乗して、福建方面に北上して密貿易を行った。ポルトガル人はまず福建南部の漳州から広東東部の潮州にかけての近海で密貿易を行ったが、一五四〇年には、華人密貿易者が寧波近海の双嶼にも、マラッカやパタニからポルトガル人を引き込んだ⁽⁹¹⁾。一五四〇年代におけるポルトガル人の琉球・日本来航は、このような華人とポルトガル人が一体化した、中国東南沿岸での密貿易の拡大という状況の一環として起こったのである。一五四〇年代から広東と東南アジア各地を往来していた王直も、こうした華人密貿易者の一人であり、彼が東南アジアの港市でポルトガル人と接触し、ともに日本方面に渡航したとしても不思議ではない。

最初期に琉球や日本に渡来したヨーロッパ人は、シヤム湾沿岸のアユタヤやパタニから、華人ジャンクに同乗して来航していた。エスカランテ「報告書」が伝えるように、まず一五四二年にはフレイタス配下のポルトガル人が、アユタヤから華人ジャンクで中国沿岸に向かう途中で琉球に漂着した。さらにエスカランテは、スペイン人のペロ・デイエス (Pero Diez) から得た情報も、「報告書」に記している。それによれば、デイエスは一五四四年にパタニから華人ジャンクに同乗して、漳州・寧波などを経て日本の港に渡航した。その港には何名かのポルトガル人を乗せた、パタニの華人が所有する五隻のジャンクが入港していた。そこに百隻以上の別の華人ジャンクが襲撃してきたが、ポルトガル人は大砲や鉄砲によつて彼らを撃退した。さらにその後、琉球諸島からも別のポルトガル人がこの港に集まってきたという⁽⁹²⁾。この事件が起こった港は、日本側に残された文書史料により、大隅半島西岸の小根占港だったことがわかる⁽⁹³⁾。

一五四二年・四三年にポルトガル人がアユタヤやパタニから、華人ジャンクに同乗して琉球や大隅半島に渡来していることを考えれば、一五四三年に種子島に来航したポルトガル人も、シヤム湾方面から来航した可能性が

比較的高いのではないか。特にパタニから来航したと考えれば、一連の事件の経緯が説明しやすい。その場合、ポルトガル人は五峯王直のジャンクに同乗して、一五四三年夏の南西風によってパタニを出航し、新暦九月二十三日に種子島に到着したことになる。もし翌春三月ごろの東北風で種子島を出航し、四月ごろにパタニに帰港したとすれば、日本到達のニュースはただちにパタニのポルトガル人や華人に広がったであろう。その結果、一五四四年の夏には、多くのポルトガル人が華人ジャンクによってパタニから九州方面に渡航し、そのうち一隻は種子島に再渡航したが、他のジャンクは中国沿岸を経て小根占に入港し、さらに別のポルトガル人も、琉球経由で小根占に來港したと考えられる。小根占港は対岸の山川とともに九州最南端の海港であり、福建方面から黒潮に乗って北上したジャンクが、まず種子島や小根占に到達するのは自然なのである。

おわりに

本稿ではポルトガル人の琉球・日本への初来航について、基本史料の分析を中心に、関連史料を参照して再検討を試みてきた。史料の限界により、なお推定にとどまった部分も多いが、現時点では本稿における推論によって、一連の事件が大筋では整合的に説明できるのではないかと考えている。最後に「鉄炮記」の叙述を基本として、関連文献による推定を加えて、一五四二〜四四年における、ポルトガル人の琉球と日本への初来航について一つの仮説を提示しておこう。以下の仮説は、ポルトガル人が一五四二年に琉球に、一五四三年に日本に到達したことを前提として、かつ王直を船主とするジャンク船が、パタニから種子島に來航したという仮定に基づいている。

一五四二年 フレイタス配下のポルトガル人が、華人ジャンクに同乗して私貿易を行うため、アユタヤから中国

沿岸に向かう途中、暴風により琉球に漂着した。彼らはアユタヤで知りあつた琉球人の仲介により国王に厚遇され、貿易を行つてアユタヤに帰航した。

一五四三年 前年とは別のポルトガル人が、華人ジャンクに同乗して琉球に再渡航したが、前年に明朝が琉球に対して密貿易の嚴禁を命じたため、上陸を許されず退去した。この年の夏、王直を船主とするジャンク船がパタニを出帆して東シナ海を北上し、新曆九月二十三日に種子島南岸に着岸した。種子島時堯はジャンクを赤尾木に廻航して貿易を行うとともに、ポルトガル人から鉄砲を購入し、その模造を試みた。

一五四四年 王直のジャンクは春季の東北風でパタニに帰航し、日本到達のニュースをうけて、この年の夏にはパタニから多くのポルトガル人が華人ジャンクに同乗して九州に向かつた。その一隻はふたたび種子島に渡航し、種子島時堯に銃底を塞ぐ技術を伝授した。一方ペロ・デイエスの乗つたジャンクは、中国沿岸を経て小根占港に渡航した。小根占港ではポルトガル人を乗せてパタニから来航した五隻の華人ジャンクが、別の華人ジャンク船と衝突し、さらに別のポルトガル人も琉球経由で小根占港に来港した。

近年の研究ではポルトガル人の日本来航を、日本銀の増産にともない、東アジア海域における華人ジャンクの密貿易が拡大し、それにポルトガル人が便乗するという、「東アジア史の文脈」で論じることが多い。⁽⁹⁵⁾ ただしいうまでもなく、ポルトガル人は華人の密貿易に、受動的に追隨しただけではなかつた。彼らの琉球・日本到達の背景には、一五四〇年代の東シナ海域密貿易の拡大に先だつ、十五世紀以来の南シナ海域密貿易の進展があつた。一五一一年のマラッカ占領により、南シナ海域の貿易構造は大きく変動し、シャム湾と東アジア海域を結ぶ貿易の重要性が増大する。さらに一五二二年にポルトガル人が広州湾を駆逐されると、密貿易の拠点は福建・浙江方面に北上し、一五四〇年代には双嶼において、中国・日本・東南アジアを結ぶ密貿易拠点が形成されていく。ポルトガル人の琉球・日本来航は、こうして東シナ海と南シナ海の密貿易が連動する過程で、ポルトガル人私貿易

者と華人海商の相互作用によって実現したのである。

注

- (1) この問題を最初に論じた研究は、坪井九馬三「鉄砲伝来考」(『史学会雑誌』三巻二九〇三二一、一九八二年)である。
- (2) 代表的な著作として、岡本良知『十六世紀日欧交通史の研究』(弘文荘、一九三六年。改訂増補版、六甲書房、一九四二年。以下、岡本『交通史』と略称)、幸田成友『日欧通交史』(初出一九四二年、『幸田成友著作集』第三巻、中央公論社、一九七二年)がある。
- (3) 代表的な著作として、長沼賢海『日本文化史の研究』(教育研究会、一九三六年)、洞富雄『種子島銃——伝来とその影響』(淡路書房新社、一九五八年)、有馬成甫『火砲の起源とその伝流』(吉川弘文館、一九六二年)、所莊吉『火繩銃』(雄山閣、一九六四年)がある。特に洞富雄『鉄砲——伝来とその影響』(思文閣出版、一九九一年)は、先行研究をひろく総括して自説を提示しており、一九八〇年代までの研究史を把握するうえで必読の文献である。
- (4) 村井章介「鉄砲伝来再考」(『東方学会創立五十周年記念東方学論集』、一九九七年)「以下、村井「再考」と略称」は、こうした一九九〇年代以降の研究の出発点となった論文である。また同「海から見た戦国日本——列島史から世界史へ」(筑摩書房、一九九七年)第4章「ヨーロッパの登場とアジア海域世界」も参照。
- (5) たとえば、E.W. Dahlgren, "A Contribution to the History of the Discovery of Japan," *Transactions and Proceedings of the Japan Society*, XI, 1914.
- (6) Georg Shurhammer, "O descobrimento do Japão pelos portugueses no ano de 1543," *Anais da Academia Portuguesa da Historia*, 2. Serie, Vol.1, 1946. 本稿では岸野久『西洋人の日本発見』(吉川弘文館、一九八九年)三〇〇三二二頁における要約に於いて論旨を紹介する。
- (7) R. Boxer, *The Christian Century in Japan, 1549-1650*, University of California Press, 1951, pp.18-27. Joseph Needham, *Science and Civilization in China, Vol.5, Chemistry and Chemical Technology, Pt. 7: Military Technology: The Gunpowder Epic*, Cambridge University Press, 1986, pp.429-430. など
- (8) 一五四二年説をとる早期の論考としては、李献璋「嘉靖年間における浙海の私商及び舶主王直行蹟考(下)」——海禁下に自由

- を求める一商人の生涯——」(『史学』三四卷二号、一九六二年)がある。一九八〇年代以降の研究としては以下の諸論考がある。清水紘一「日葡交渉の起源」(初出一九八六年、『織豊政権とキリシタン——日欧交渉の起源と展開——』岩田書店、二〇〇一年所収)以下、清水「起源」と略称)と略称)同「ポルトガル人の種子島初来年代をめぐって——日欧交渉の起源・補遺——」(『南島史学』六四号、二〇〇四年)、村井章介前掲「鉄砲伝来再考」、同前掲「海から見た戦国日本」、同「鉄砲はいづ、だが、どこに伝えたか」(『歴史学研究』七八五号、二〇〇四年)、的場節子「南蛮人日本初渡来に関する再検討」(『国史学』一六二号、一九九七年)、佐々木稔編『火縄銃の伝来と技術』(吉川弘文館、二〇〇三年)、関周一「一六世紀アジアにおける鉄砲と戦争」(小林一岳・則竹雄一編『もの』から見る日本史 戦争Ⅰ 中世戦争論の現在』青木書店、二〇〇四年)。
- (9) 清水紘一「鉄砲記」の基礎的研究」(『中央大学論集』二七号、二〇〇六年)、同「鉄砲の初期普及過程(1)」(『史料研究』三号、二〇〇六年)、同「鉄砲の初期普及過程(2)」(『史料研究』四号、二〇〇七年)、清水有子「ポルトガル人日本初来に関する基礎的問題」(『南島史学』六七号、二〇〇六年)以下、清水有子「基礎的問題」と略称)。また的場節子「ジパングと日本 日欧の遭遇」(吉川弘文館、二〇〇七年)第四章「ポルトガル人日本初渡来再考」では、ポルトガル人の日本初来は一五四二年であるが、種子島来航は一五四三年であるとす。
- (10) 伊川健二「大航海時代の東アジア 日欧通交の歴史的前提」(吉川弘文館、二〇〇七年)第二部第二章「倭寇的遣明使節」・第三章「日欧通交の成立事情」では一五四三年説をとり、関周一「鉄砲伝来をめぐる近年の歴史学研究」(『鉄砲史研究』三五四号、二〇〇六年)では、筆者の前稿を紹介して両説を併記する。
- (11) たとえば註(9)前掲の諸論考では、先行する筆者の論文にまったく言及していない。
- (12) なお筆者はポルトガル語・スペイン語を解さないため、両国語の史料は和訳または英訳によって利用した。
- (13) Richard Hakluytの英訳と、ポルトガル語原文を併録したテキストと)『Antonio Galvano, Discoveries of the World: From their First Original unto the Year of our Lord 1555. London, Hakluyt Society, 1862.がある。なおガルヴァンの略歴については、同書のPrefaceを参照。モルッカ総督としての事績については、生田滋『大航海時代とモルッカ諸島——ポルトガル、スペイン、テルテナ王国と丁子貿易——』(中央公論社、一九九八年)二一四〜二四二頁に詳しい。
- (14) 引用は清水有子「基礎的問題」四四頁の和訳による。原文と英訳は、Discoveries of the World, pp.229-230を参照。
- (15) 清水有子「一六世紀イベリア両国の東アジア進出——ヴィリャロボス艦隊の事例を中心に——」(メトロポリタン史学会編『歴

史のなかの移動とネットワーク』桜井書店、二〇〇七年）では、スペイン史料によりこの艦隊の航海を詳しく論じている。このほか、Emma Helen Blair and James A. Robertson eds., *The Philippine Islands, 1493-1803*, Cleveland: A.H. Clark, 1903-09, Vol.2, pp.445-73. “The Expedition of Ruy Lopez de Villalobos - 1541-46.” 岸野前掲『西欧人の日本発見』一九頁を参照。

(16) 岸野前掲『西欧人の日本発見』二〇頁。

(17) 引用は岸野前掲『西欧人の日本発見』二五～二七頁の和訳による。なお清水有子「基礎的問題」四五～五一頁にも、原文と和訳が収められている。

(18) 岸野前掲『西欧人の日本発見』三〇～三二頁。幸田前掲『日欧通交史』一一～一二頁でも、同じ推定がなされている。なお「鉄炮記」では、このほかに紀州根来寺の僧兵や堺の商人が種子島に来訪し、鉄砲を畿内へ伝えたことも記し、後半では種子島家の家臣が鉄砲を持って遣明船に乗り込み、帰航時に伊豆に漂着して、関東にも鉄砲を伝えたことを記している。

(19) 『南浦文集』には、寛永二（一六二五）年古活字本と、慶安二（一六四九）年整版の二つの版本がある。洞『鉄砲』四六三～四七一頁には、慶安二年版『南浦文集』により、「鉄炮記」の原文と書き下しを収める。また清水前掲「鉄炮記」の基礎的研究」も、慶安二年版により原文・書き下し・語釈などを収めるが、書き下しには問題が多い。

(20) なお「鉄炮記」の前半によれば、種子島で鉄砲の模造に成功したのは一五四五年初頭以降のことになるが、後半では一五四四年に種子島を出帆した遣明船に、種子島家の家臣が鉄砲を持って乗りこんだことになっており、年代的に矛盾がある。これによって、「鉄炮記」の前半では、一五四二年の鉄砲伝来を誤って一五四三年と記したとする見解もある（李献璋前掲「嘉靖年間における浙海の私商及び舶主王直行蹟考（下）」五〇～五一頁、村井「再考」一一一～一二二頁）。しかし日中の関連史料を照合して検討すると、この遣明船の出帆年は一五四五年とすべきであり、むしろ「鉄炮記」の後半部分に年次の誤りがあると考えられる（中島「海域交易」五四～六一頁）。

(21) 『種子島家譜』巻二、十三代恵時、巻三、十四代時堯の項（鹿兒島県史料 旧記雑録拾遺家わけ四）鹿兒島県、一九九四年、二四～二五頁、二九頁。この記事は主として「鉄炮記」の要約によると思われるが、内容的には若干の異同もあり、あるいは「鉄炮記」と『種子島家譜』の共通の史料源となった、種子島家の旧記類があったのかもしれない。なお天文十三年のポルトガル人の第二回来航について、「鉄炮記」では時期を記さないが、『種子島家譜』では「今春」とする。ただし西北風から東北風が卓越する春期は、中国大陸や東南アジアから種子島に外洋船が来航する時期ではなく、疑問である。

(22) 伊地知季安『寛永軍徴』(天保三年ころ成稿)卷三「邪宗禁制の巻」には、「天文」十二年八月、大洋杜瓦爾人、牟羅叔西亞・吉利^{キリ}下駄孟^{モウ}太等、大隅の種子島に來たり、亦た銃砲を伝う」という記事がある(鹿兒島県史料 旧記雜録拾遺 伊地知季安著作史料集一)鹿兒島県、一九九七年、一九九頁。フリガナは原文のまま)。季安が「鉄炮記」の「喜利志多佐孟太」・「牟良叔舎」を、わざわざ「吉利下駄孟太」・「牟羅叔西亞」に改めたとは考えがたいので、あるいは「鉄炮記」とは別に、鉄炮伝來に関する旧記類が存在したのかもしれない。その場合、ポルトガル人の名はまず「キリシタダモウタ」・「ムラシユクシャ」として伝えられ、それが異なる漢字で表記されたということになろう。

(23) Boxer, *The Christian Century in Japan*, p.26.

(24) 清水「初来説」二〇頁では、I a「発見記」とII「鉄炮記」に現れる「ダ・モッタ」を別人とするためには、「学問的な手続き」として同時期に來日した「同名異人」複数の存在を明示することが前提として求められ、現段階ではI aのダ・モタとIIの佐孟太は同一人物と推定されると説く。しかし当時アジア海域に渡來した多くのポルトガル人のうち、一般の船員の名前が史料に残ることはごく例外的であり、たとえ姓名が史料上に現れなくても、同姓の別人が同時期のアジア海域で活動していた可能性は十分に考えられる。なおの場節子氏も、当時のポルトガルやスペインでは同姓の別人も多く、また兄弟・親族がともにアジアに渡來したり、同一人物が渡來をくりかえす場合もあるので、姓名の類似性だけで『発見記』と『鉄炮記』を結びつけることは難しいと指摘している(前掲『ジバンゴと日本』一〇九頁)。

(25) 「牟良叔舎」の発音は近代音(明清期の標準音)では *mau-lian-siu-sie*、広東音では *mu-lian-juk-je*、閩南音では *bo-ling-sik-sia* となる。この中では閩南音が比較的Franciscoに近いが、閩南音では「佐孟太」が *tho-bing-thai* となり、ダ・モタとは読めなくなってしまう。なお「佐孟太」の近代音は *thu-mung-thai*、広東音は *tho-mang-thai* である(以上「漢字古今音表(修訂本)」中華書局、一九九九年による)。「佐孟太」を *da Mota* と読むには、日本語の「ダモウタ」がもっとも近く、おそらく「牟良叔舎」・「喜利志多佐孟太」は、原音を日本漢字音で写した表記ではないかと思われる。なお清水紘一氏は「牟良叔舎」は「弗良叔舎」の誤記ではないかとも推定している(「初来説」三四頁、註(23))。たしかに「弗良叔舎」とすれば日本語での発音はFranciscoにもやや近くなるが、「牟」と「弗」では字体もかなり異なり、憶測の域を出ない。

(26) 清水「起源」五八〜五九頁、同「初来説」二二〜二三頁。なお所荘吉氏は、まず一五四二年に三人のポルトガル人が北緯三十二度にあたる薩摩の阿久根に漂着し(I a「発見記」、翌四三年には二人のポルトガル人が種子島に來航した(II「鉄炮記」と

推定している（『日本銃砲史（5）』『銃砲史研究』二〇八号、一九八九年）。しかしこの説でも、I b「報告書」において漂着地を琉球しゅうきゅうと述べていることの説明がつかない。

- (27) 清水「起源」六一〜六三頁、村井「再考」一一二六頁、註(12)、関前掲「火繩銃の伝来をめぐって」二二四頁。
- (28) 村井前掲「鉄炮はいつ、だが、どこに伝えたか」一三頁。
- (29) 『歴代宝案』巻四十二、移彝執照、校訂本第一冊、六二四頁、一四二一三二（嘉靖十九年九月二十日）。同六二五頁、一四二一三三（嘉靖二十年九月七日）。中島「海域交易」四七頁。
- (30) 一五四〇年の貿易船は新曆十月十一日に、一五四一年の貿易船は九月二十六日に那覇を出帆している。アユタヤからは四月〜五月の南西風で帰帆の途についてと思われる。フレリタス配下のポルトガル人も、四二年四月以降の季節風でアユタヤを出帆したと思われるが、琉球の貿易船と同時期に出帆したとしても、中国に向かう途中で漂流したため、那覇への漂着は遅れたはずである。こうした状況を考えれば、彼らがアユタヤで接したのは一五四一年の琉球船であった可能性がより強そうである。
- (31) トメ・ピレス（生田滋等訳注）『東方諸国記』（岩波書店、一九六六年）五七三頁、補注十。なおアルプケルケの記事で、琉球人の商品として金だけを挙げて銀に言及しないのは、石見銀山の発見以前の情報だからである。
- (32) 『世宗実録』巻二百六十一、嘉靖二十一年五月辛巳朔条。
- (33) 中島「海域交易」四七〜四八頁。なお清水「起源」四二頁、同「初來說」一四頁では、『中山世譜』嘉靖二十一年条に、陳貴事件の結果として、「これより後、中国の商船は終に復た来たらず。但し本国の諸夷海国と交通するあるのみ」とあることを引いて、この事件以降、中国商船の渡航は途絶しており、四三年にポルトガル人が乗ったジャンクが琉球に来航したはずはないと主張する。しかし明朝の禁令は東南アジア華人にまで及んだわけではなく、琉球（本国）と東南アジア諸国（諸夷海国）との通航は継続していた。四四年に琉球に渡航したポルトガル人も、東南アジア華人のジャンクに同乗していたと考えられる。また一五四四年にも、ポルトガル人が琉球を経て南九州に来航したことが記録されている（岸野『日本発見』二九頁、「ペロ・ディアスの情報」）。
- (34) 清水有子「基礎的問題」四三〜四四頁・五二〜五三頁、清水「初來說」一三〜一四頁では、『発見記』の日本情報はポルトガルの官憲ないし王府から入手したと推測するが、具体的な根拠はない。
- (35) Galvano, *Discoveries of the World*, pp.230-231. 詳しうは中島「海域交易」四九〜五〇頁。

- (36) たとえば『発見記』では、一五四三年十月にピリャロボス艦隊の分遣隊が、フィリピン諸島の北緯十五〜十六度（ルソン島附近）で色の白い住民に会い、彼らは五〜六日以内の航程で中国まで渡航すると語ったという記事がある（*Discoveries of the World, p.235*）。もちろんルソン島附近に色の白い住民がいたとは考えられず、またルソン島から中国への航海には、一般に十五〜二十日ほどが必要である。
- (37) 生田滋『大航海時代のモルッカ諸島』（中央公論社、一九九八年）二五二頁。
- (38) 岡本前掲『十六世紀日欧交通史の研究』一六二〜一六四頁に全文が紹介されている。
- (39) ピレス前掲『東方諸国記』、「補注」五九七頁。
- (40) 岡本『交通史』一四五頁に、「日本発見の記載は、ガルワンと同じい出所に拠ったか、ガルワンの著書に従ったのであろう。漂流の様子を詳しく記し得て島名を記さないのは、恐らく前者の敷衍であることを推定せしめる」とある。
- (41) ジョアン・ロドリゲス（江馬務等訳）『日本教会史』上（岩波書店、一九六七年）一八四〜一八七頁。
- (42) 清水「起源」六四〜六五頁、同「初來說」一三〜一五頁、清水有子「基礎的問題」五五〜六一頁。
- (43) 的場前掲『ジバングと日本』一一七〜一九頁。また清水有子「基礎的問題」五七頁も参照。
- (44) 合田昌史『マゼラン——世界分割を体現した航海者』（京都大学学術出版会、二〇〇六年）。
- (45) トメ・ピレス前掲『東方諸国記』二四八〜二五〇頁。
- (46) 岡本『交通史』八四頁、合田前掲『マゼラン』一六八〜一六九頁。
- (47) 岡本『交通史』一〇六〜一〇七頁。
- (48) トメ・ピレス前掲『東方諸国記』二五一頁。
- (49) 岡本『交通史』一一一頁。
- (50) 清水有子「基礎的問題」五七頁。
- (51) 一五四三年に琉球に渡航したポルトガル人は、上陸を許されずに退去しているので、その秋の季節風でシヤム方面に戻ったと思われ、フレイタスは当然その情報を得ることができたはずである。
- (52) 岸野前掲『西欧人の日本発見』三〇〜三一頁に紹介するシュールハンマー説。
- (53) もし『発見記』が説くように、一五四二年にフレイタス配下のポルトガル人が日本を発見していれば、彼らは四三年の四〜五

月ごろにシヤムに戻り、フレイタス兄弟はその情報を知ることができたはずである。

(54) 清水「起源」三二〜五〇頁、同「初來說」二〜九頁。

(55) 清水氏は「鉄炮記」の末尾近くに、「今この物「鉄砲」の我が朝に行わるや、蓋し六十有余年なり。鶴髪の翁、猶お明らかにこれを記する者あり」という一節があることを引いて、「鶴髪の翁」による記録＝「老人記録」が「鉄炮記」の原資料となったと説いている。しかし「鶴髪の翁、猶お明らかにこれを記する者あり」とは、「白髪の老人にはまだ（鉄砲伝来を）記憶している者もいる」という意味にすぎず、「老人記録」なる資料の存在を示すものではない。中島「海域交易」六六頁、註(22)参照。ただし清水「初來說」五〜六頁では、重ねて「老人記録」の存在を主張している。その論拠は、辞書的には「記」には「記録する」・「記憶する」の両義があり、「明記」には「はっきりと書き記す」意味があること、『日葡辞書』では「記」を「年代記・歴史書」と解することなどである。しかし動詞としての「記」について、漢語辞典としてもっとも定評ある『漢語大詞典』（漢語大詞典出版社、一九九三年）では、「①不忘、把印象保持在腦中。②記録・載録」と、「記憶する」を第一義とする。特に禪語では、「記在」（ちゃんと憶えている）・「記持」（諳んじる）・「記取」（ちゃんと記憶する）、記得（憶え込む）など、「記憶する」意味で用いることが多い（『禪語辞典』思文閣出版、一九九一年、七五〜七六頁）。もちろん「明記之」だけでは、「これを記憶する」と「これを記録する」の両義があるが、この場合は直前に「猶」（なお・まだ）という副詞があること、および前後の文脈によって、前者の意味に限定される。「今この物の我が朝に行わるや、蓋し六十有余年なり。鶴髪の翁、猶お明らかにこれを記する者あり」という一節は、自然に「鉄砲伝来から六十余年たったが、白髪の老人にはそれをまだ憶えている者がある」と解され、「白髪の老人が、かつてそれを記録した」と解することはできない。

(56) 清水「起源」三七〜三九頁、同「初來說」八〜九頁では、『種子島家譜』巻四の、慶長十一年十二月二日の記事に、「（種子島）弾右衛門時定、久時の意に違うを以て現和村に自殺す。この時、公の屋久島・恵良部島を借るの証、及び当家の文書は時定の手であり、恨みを含んで尽く焼化す」とあることにより、南浦文之が「鉄炮記」を執筆した慶長十一年ごろには、一族の種子島時貞が種子島家の重要文書を管理していたとする。そして文之はこうした文書を参照できず、「老人記録」や手元の関係史料と、久時からの伝聞によって「鉄炮記」を執筆したと推定している。しかし種子島時定が多くの重要文書を管理し、自害の際にそれらを焼却したとしても、すべての重要文書が彼のもとにあったわけではなく、種子島久時のもとにもかなりの旧記や文書が残されていたはずである。現に文化二（一八〇五）年重修の『種子島家譜』には、四卷（久時の代）までに総計八十四通もの古文書が

引用されている（前掲『鹿児島県史料 旧記雑録拾遺家わけ四』、「解題」一三頁）。

(57) Boxer, *The Christian Century in Japan*, pp.18-24. メンデス・ピント（岡村多希子訳）『東洋遍歴記』3（平凡社、一九八〇年）、岡村多希子「解説」三〇四頁。ただし『遍歴記』では、ポルトガル人の種子島漂着の年月は明記しておらず、前後の記事にも年月の矛盾や混乱が多いので、それ自体では年次比定の手がかりとはならない。

(58) メンデス・ピント（岡村多希子訳）『東洋遍歴記』2（平凡社、一九八〇年）百三十二〜百三十五章（一六三〜一八〇頁）。

(59) 的場節子氏前掲『ジパングと日本』第五章「ピント『遍歴記』日本初来記事と島銃伝来」では、この「ナウトキン」を「直時」の音訳ではなく、ポルトガル語の「ナウ」(nao)と日本語の「大君」の合成語と想定する。そしてナウトキンが「豊後王」が彼の母の兄弟であり、妻の父でもあると述べていることに注目し（前掲『東洋遍歴記』2、一七五〜一七六頁）、「ナウタキン」とは豊後大友氏と密接な姻戚関係があった土佐中村の一条氏の一族であると論じる。しかし『遍歴記』では、「ナウタキン」を種子島の領主として描いており、また土佐一条氏の一族が種子島に在住していたという記録もない。『遍歴記』では大筋として実際の事件をふまえている場合でも、ディテールには創作や誇張も多く、その一字一句に拘泥する必要はないであろう。

(60) 前掲『東洋遍歴記』3、「解説」三〇〇〜三〇一頁。

(61) 清水「起源」四三〜五〇頁、同「初来説」八頁では、『種子島家譜』における禰寝氏の種子島侵攻の年次を手がかりに、「鉄炮記」における鉄炮伝来の年次は誤りだと推測する。清水氏の論旨は次のとおりである。①『種子島家譜』巻三では、大隅半島の禰寝氏が、天文十二（一五四三）年に種子島に侵攻したと記すが、『島津貴久記』などの記事から、禰寝氏の侵攻は天文十一（一五四二）年であったと考えられる。②一方、種子島家中では、禰寝氏の侵攻と鉄炮伝来が同一年に生じたとする記録や伝承が存在したと思われる。③上妻隆直は『種子島家譜』を編纂するにあたり、鉄炮伝来の年次は「鉄炮記」により天文十二年とした。さらに禰寝氏侵攻の年次も、それが鉄炮伝来と同一年に生じたという記録や伝承に基づき、天文十二年とした。④実際には禰寝氏侵攻は天文十一年の事件であり、同年に生じたはずの鉄炮伝来も天文十一年の事件と考えられる。しかしこの推論の問題は、禰寝氏侵攻が実際に天文十一年の事件だったとしても、②・③の部分がない論拠がない憶測にすぎないことになり、したがって④の結論も憶測の域を出ないのである。

(62) なお最近、的場節子氏・伊川健二氏は、『発見記』と「鉄炮記」の記事を両立させる、次のような新解釈を提示している。まず的場氏は、一五四二年にまず三人のポルトガル人が日本近海に漂着し（『発見記』）、四三年には別のポルトガル人が種子島に来航

した（『鉄炮記』）と推定する（前掲『ジパングと日本』第四章）。ただし、場氏の説では、「報告書」が四二年の漂着地を琉球とすることに對する明確な説明がなされておらず、この点で説得性に欠ける。一方伊川健二氏は次のように論じる。①一五四二年にフレイタス配下のポルトガル人が、暴風により日本近海に漂流した（『発見記』）。②しかし彼らは日本には着岸せず、琉球に引き返して上陸する（『報告書』）。③翌四三年には、別のポルトガル人が種子島に来航し、鉄砲を伝えた（『鉄炮記』）（伊川前掲『大航海時代の東アジア』一五三〜一五八頁）。伊川氏の解釈は、たしかに『発見記』・『報告書』・『鉄炮記』の記事を両立させる一つの可能性を示すものといえる。ただし伊川氏のように考えた場合、なぜ『発見記』では日本近海への漂流だけを記して、琉球漂着については無視したのかという疑問がある。また逆に、もしフレイタス配下のポルトガル人が日本を発見していたとすれば、なぜフレイタスはエスカランテに、琉球漂着だけを伝えて日本発見については語らなかったのかという疑問も生じる。筆者としては、現時点ではやはり『発見記』の記事は、「報告書」の琉球漂着記事を誤り伝えたものと考えておきたい。

(63) 村井「再考」、同前掲『海から見た戦国日本』。

(64) たとえば『鉄炮記』では、南蛮船に乗船していた明人の五峯が、西村織部丞に対し、砂浜に字を書いて筆談し、「これは西南蛮種の賈胡なり。……所謂、賈胡一処に到らば輒ち止まるといふは、これその種なり」と述べたという一節がある。これは、『後漢書』卷二十四、馬援列伝の、「伏波は西域の賈胡に類し、一処に到らば輒ち止まる」という一句を踏まえたものだが、明人五峯に一定の教養があったとしても、未知の土地に到着して、現地住民と筆談するに際して、わざわざ古典の一節を引いたとは考えられない。この部分は文之による術学的な文飾と見るべきだろう。

(65) 岸野『日本発見』二七〜三〇頁「ガリシアアペロ・デイエスの情報」。

(66) ルイス・フロイス（松田毅一・川崎桃太訳）『日本史』7（中央公論社、一九七八年）第三八章、一四五〜一四六頁。

(67) 『聖フランシスコ・ザビエル全書簡』（河野純徳訳）（平凡社、一九八五年）、書簡第九〇、四六五〜四七一頁。

(68) 岡本『交通史』三〇一〜三一二頁、岸野久「ザビエルと日本——キリシタン開教期の研究——」（吉川弘文館、一九九八年）第二章、「ザビエルの日本開教とポルトガル商人の役割」。

(69) 村井前掲『海から見た戦国日本』第五章「日本銀と倭人ネットワーク」。

(70) 『種子島家譜』卷二、第十三代忠時。前掲『鹿児島県史料 旧記雑録拾遺家わけ四』二三頁。

(71) 中島「海域交易」六三頁参照。

- (72) 前掲『遍歴記』2、一六三〜一六七頁
- (73) 前掲『聖フランシスコ・ザビエル全書簡』四七〇〜四七一頁、四九八〜四九九頁・註五〜八。
- (74) 鄭舜功『日本一鑑』窮河話海卷七、風汛。
- (75) 村井「再考」一一一〜一一五頁。同前掲『海から見た戦国日本』一一一〜一一六頁。
- (76) 鄭若曾『籌海図編』卷九、擒獲王直。
- (77) 斯波義信「綱首・綱司・公司・ジャンク商船の経営をめぐる」(森川哲雄・佐伯弘次編『内陸圏・海域圏交流ネットワークとイスラム』九州大学21世紀プログラム「東アジアと日本：交流と変容」二〇〇六年)。
- (78) 以上詳しくは、中島「海域交易」五四〜六一頁参照。
- (79) トメ・ピレス前掲『東方諸国記』四九〇頁。アンソニー・リード(平野秀秋・田中優子訳)『大航海時代の東南アジア 1450-1680年 II 拡張と危機』六六〜六七頁参照。
- (80) 生田滋「東南アジアの大航海時代」(岩波講座東南アジア史3『東南アジア近世の成立』岩波書店、二〇〇二年)八一〜八六頁。
- (81) Roderich Prak, "Merchants and Maximazation: Notes on Chinese and Portuguese Entrepreneurship in Maritime Asia, c. 1350-16," In *China and Asian Seas: Trade, Travel and Visions of the Other (1400-1700)*, Aldershot: Ashgate Publishing Limited, 1998, p.54.
- (82) 生田前掲「東南アジアの大航海時代」八六頁。
- (83) Donald Ferguson, "Letters from Portuguese Captives in Canton, Written in 1534 and 1536," *The Indian Antiquary*, Vol. XXXI, 1902, pp.14-15.
- (84) 朱紘『壁餘雜集』卷五、章疏四、「六報閩海捷音事」。
- (85) 顧炎武『天下郡国利病書』原編第三十三冊、交趾西南夷、仏朗機國の条。
- (86) トメ・ピレス前掲『東方諸国記』一一二〜一二二頁、四五五〜四七二頁。
- (87) Roderich Prak, "Ming Maritime Trade to Southeast Asia, 1368-1567: Visions of a "System,"" In *China, Portuguese and the Nanyang: Oceans and Routes, Regions and Trades (c. 1000-1600)*, Aldershot: Ashgate Publishing Limited, 2004, pp. 177-182.

- (88) 矢野仁一『支那近代外国関係研究——ポルトガルを中心とせる明清外交貿易——』（弘文堂、一九二八年）三二〇—三三三頁、張增信『明季東南中国的海上活動』上編（中国學術著作奨助委員会、一九八八年）一九五—二二二頁など。
- (89) ガスパール・ダ・クルス（日埜博司編訳）『クルス「中国誌」』（新人物往来社、一九九六年）二〇一—二〇五頁。
- (90) 矢野前掲『支那近代外国関係研究』二七四—二九六頁、張增信前掲『明季東南中国的海上活動』上編、二二二—二四二、二九一—三〇四頁など参照。
- (91) 鄭舜功『日本一鑑』窮河話海卷六、流通。
- (92) 岸野『日本発見』二七—三〇頁「ガリシア人ペロ・デイエスの情報」。
- (93) 「池端文書」七三二・七三三「沙弥清本讓状案」（『旧記雜録拾遺家わけ』鹿兒島県、一九八八年、四七〇頁）。清水「起源」五五—五八頁、清水前掲「ポルトガル人の種子島初来年代をめぐって」一一—一五頁、岸野久「パウロ・デ・サンタフェ・池端弥次郎重尚同一人説について」（初出一九九六年、『ザビエルと日本——キリシタン開教期の研究——』吉川弘文館、一九九八年所収）参照。
- (94) 一五四四年に種子島に再来航したジャンクが、さらに北上して小根占に到った可能性もある。
- (95) 村井前掲「鉄砲はいつ、だれが、どこに伝えたか」一五頁。

1542年、ポルトガル人の
琉球漂着推定ルート

1543年、ポルトガル人の
種子島来航推定ルート

1549年、フランシスコ・
ザヴィエルの来日ルート

